研究旅行　要旨

移民国家アメリカと都市
―ニューヨーク市を中心とした実地調査―

18AR076 武藤玲奈

本研究旅行の目的は、2018 年 1 月に提出予定の卒業論文『移民の社会参入―ニューヨーク市のエスニックタウンを中心に―』（仮）の執筆に際して、論証材料となる具体的な事例を収集することにある。そこで、移民国家としてのアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）の歴史的な歩みについて、ニューヨーク市で実地調査を行った。

筆者がニューヨーク市を選んだ理由には、まず、市人口の約 37%を移民が占めることが挙げられる[1]。それに加えて、市内労働者の約 43%を移民が占めるということから、「移民国家アメリカ」を最も象徴する大都市であると考えたからである。

研究方法としては、9 月 1 日から 12 日にかけて、各種移民博物館の展示調査や学芸員へインタビュー、エスニックタウンでフィールドワークを行った。この際に、研究対象を「在米移民」と広く定義し、各時代における存在や役割に注目した。これらの活動を通して、移民の社会参入の在り方を多角的な視点で捉えることができた。

[1] U.S. Census Bureau 2011

2017 年度

国際文化学部　国際文化学科　研究旅行奨励制度

報告書

移民国家アメリカと都市
―ニューヨーク市を中心とした実地調査―

アメリカ太平洋文化コース　朝立ゼミ所属　18AR076　武藤玲奈

目次

はじめに
研究目的
研究対象と調査手法
研究日程

研究成果
第一章　ニューヨーク市
第二章　ドイツ系アメリカ人
第三章　ユダヤ系アメリカ人
第四章　イタリア系アメリカ人
第五章　中国系アメリカ人

終わりに

はじめに

研究目的

本研究旅行の主眼は、移民国家としてのアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）の歴史的な歩みについて、ニューヨーク市の各時代に焦点を当てて実地調査することに置かれている。

周知のように、北アメリカ大陸への移民は 17 世紀初頭におけるイギリス系の人々にその起源を辿ることができるが、それから現在に至るまで、移民集団の地域的出自は全体として多様化する傾向を示している。19 世紀までは北西欧系の人々が中心であったが、20 世紀転換期より南東欧系やアジア系の人々が急速に増大し、また 20 世紀半ばにはアフリカ系の人々が、20 世紀末からはヒスパニック系の人々が移民としてアメリカ社会に参入したのであった。そしてこうした各移民集団に共通することとして、雇用機会が比較的豊富な都市部を居住先に選んでいることが挙げられる。

多くの移民研究が指摘するように、移民は都市における不可欠の労働力として機能しただけでなく、都市の内部に様々な生活コミュニティを形成し、独自の文化を維持し発展させてきたのであった。この点でアメリカの都市部は、移民国家アメリカを象徴する空間であるといえるだろう。また、移民の社会参入について考える上で都市での生活は大きな鍵となる。

とりわけ、本研究旅行において注目するニューヨーク市は、大西洋に面する最大の開港都市として、17 世紀より多くの移民を受け入れ、現在もなお市人口の 37%を移民が占めると同時に、市内労働者の 43%を移民が占めるなど、移民国家アメリカを最も象徴する大都市であると言える。

以上のことから、ニューヨーク市に焦点を当てて各時代における移民の社会参入の在り方を調査することは、移民国家アメリカの歴史と現在の全容理解に資するものと考えられる。

研究対象と調査方法

筆者は、都市における移民の社会参入について調査する上で、次のことを考えた。ニューヨーク市には多様な移民が居住するため、その関連性を見つけ出すと共に特性を分類する必要があるということだ。その方法として、まず一つ目に、各時代に注目することが挙げられる。同じ移民という枠組みであるため、出身が異なる場合でも、同時代にアメリカへ足を踏み入れた者には共通点があると予想されるからだ。一方で、出身が異なれば、歴史や文化も異なるため、アメリカでの生活に相違点があることも考えられるからである。二つ目に、歴史的由来のある博物館やエスニックタウンが残る移民集団について調査することが挙げられる。これらの場所では、各移民の生活、労働状況を詳細に知ることができるだろう。

具体的には、A.19 世紀前半（ドイツ系）、B.19 世紀後半（ユダヤ系、イタリア系）、移

民規制を経て、C.20 世紀後半（中国系）に移民数が増加したと言われるこれらの移民集団にまつわる場所を調査した。その方法は、第一に博物館学芸員や現地住民に各移民集団の歴史、現在についてのインタビューをすることであった。この際に、高年層と若年層の両者にアポイントを取り、世代による生活や意識の違いを浮き彫りにすることを意識した。そして第二の方法としてエスニックタウンの実地調査を行った。これに関しては各移民集団を象徴する建物や場所、風景を捉え、歴史的背景を理解することを目的とした。

以上に加え、移民都市へと変化したニューヨーク市自体の歴史理解のために、博物館や歴史協会（マンハッタン、ブルックリン）を訪問する。このことにより、ニューヨーク市と移民の関係性の理解を強化した。

研究日程

日付	滞在地	行動・調査内容
9 月 1 日（金）	日本→ニューヨーク	移動日
9 月 2 日（土）	ニューヨーク市	在米中国人歴史博物館 Museum of Chinese in America チャイナタウン China Town
9 月 3 日（日）	ニューヨーク市	在米イタリア人歴史博物館 Italian American Museum リトルイタリー Little Italy
9 月 4 日（月）	ニューヨーク市	テネメント博物館 Tenement Museum
9 月 5 日（火）	ニューヨーク市	自由の女神 Statue of Liberty エリス島移民資料館 Ellis Island
9 月 6 日（水）	ニューヨーク市	ロウワーイーストサイド Lower East Side
9 月 7 日（木）	ニューヨーク市	ユダヤ博物館 The Jewish Museum
9 月 8 日（金）	ニューヨーク市	ニューヨーク市立博物館 Museum of the City of New York
9 月 9 日（土）	ニューヨーク市	ニューヨーク歴史協会 New York Historical Society
9 月 10 日（日）	ニューヨーク市	ブルックリン歴史協会 Brooklyn Historical Society
9 月 11 日（月）	ニューヨーク→仁川	移動日
9 月 12 日（火）	仁川→日本	帰国

研究成果

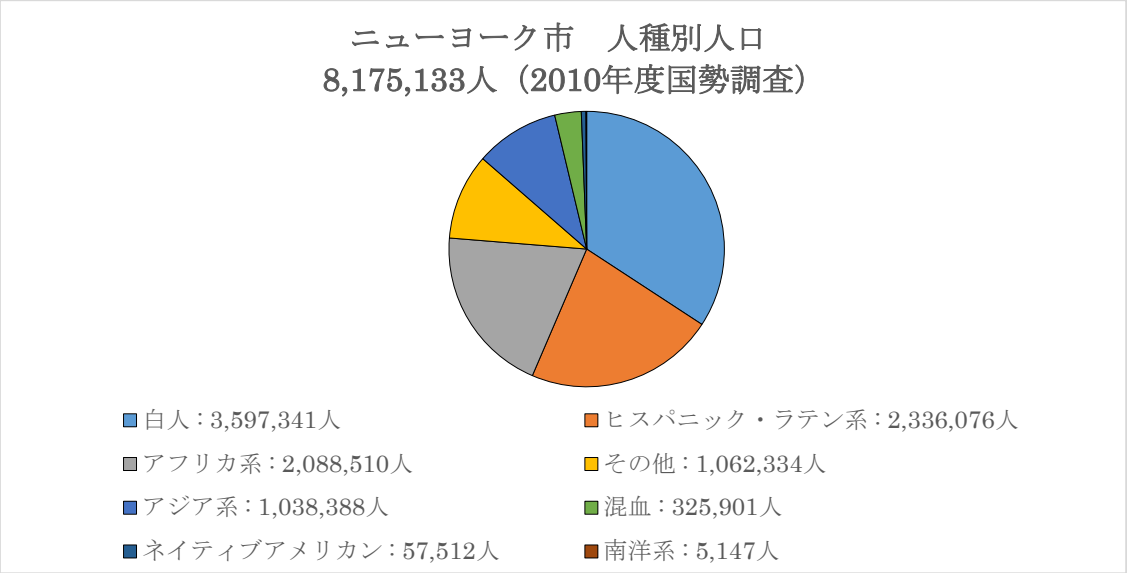
第一章　移民都市ニューヨーク

第一節　ニューヨーク市

まず初めに、実地調査を行ったニューヨーク市の概要について、ニューヨーク市立博物館、ニューヨーク歴史協会、ブルックリン歴史協会の展示内容を交えながらまとめてみたい。

ニューヨーク市の起源は、1614 年 9 月 11 日にヘンリーハドソンがマンハッタン島を発見したことに遡る。彼の名は、どの博物館、資料館でも名が出てくるほど、ニューヨーク市にとって大きな存在である。彼は、ハドソン川を上り、現在の州都オールバニまでを開拓した。オランダ（1626 年）、イギリス（1664 年）による植民地化や戦争の間にこの地の名称は、ニューオレンジを経て、ニューヨークへと至った。現在のニューヨーク市は、ブロンクス、ブルックリン、マンハッタン、クイーンズ、スタテンアイランドの 5 つの地域で構成されている。

同市は、海と川の最良の地理的条件により繁栄し、大航海時代[2]には海運業を中心に栄えた。これが、現在世界の中心都市とも呼ばれ、多くの移民が共生する都市の興りだと言われている。それから時を経た 19 世紀末から 20 世紀初頭は、ヨーロッパからの移民の最盛期であった。その当時、オーストリア、ハンガリー、イタリア、ロシアといった東欧や南欧からの出身が多数を占めていた。20 世紀初頭以降の反移民感情の高まりと共に、彼らは新移民と称されるようになる。それに対して同時に、19 世紀半ば以前のイギリスやドイツからの移民は旧移民と称され、区別する言葉が作られた。このことは、移民について調査する上で押さえておく必要がある。以上を踏まえ、現代の人種別人口比率について分析してみたい。



グラフ 1 U.S. Census Bureau 2011, American FactFinder を参考に筆者が作成。

[2] 15 世紀から 17 世紀半ばまで、スペインとポルトガルを中心としたヨーロッパ人によるアフリカ、アジア、アメリカ大陸への大規模な航海が行われた時代。

このように、ニューヨーク市には様々な民族を背景とする人々が居住しており、アメリカとしての人口比率と比較すると、白人以外の割合が高い傾向にある。移民は単純に数を増やしているだけではなく、社会を支える不可欠的な存在とも言える。

2016 年 10 月 6 日に、都市未来センターは、労働人口の約 50%を移民が占めているという報告書を発表した。その中で、移民の割合が 70%を超える職種は 37 種挙げられている。

順位	職種	割合
1 位	繊維、衣類、アイロン職人	96%
2 位	料理人、駐車場係員	78%
3 位	溶接工、はんだ付職人、ろう付職人	72%
4 位	医療技術者	71%
5 位	土木技師	60%

表 1 https://www.metro.us/news/local-news/new-york **を参考に筆者が作成**

表から分かるように、移民の労働者としての社会的役割は多岐に渡る。今となっては労働者人口の多くを占める彼らであるが、北アメリカ大陸へ足を踏み入れた時代に、彼らはどのような存在だったのだろうか。次の節では、彼らの起源について辿っていきたい。

第二節　ニューヨークへの移民の歴史的推移―エリス島移民資料館の調査―

写真 1　エリス島移民資料館外観　撮影者：武藤

移民の歴史を求め、エリス島移民資料館に足を運ぶ者の数は年間 300 万人を超える。ここは、1892 年に入国審査施設が建設された島である。それから約 60 年に渡り、約 1200 万人の移民を受け入れていた。これは、現在のアメリカ人の 40%がそのうちの子孫であることを意味する。現在、入国審査施設は閉鎖され、移民資料館としての役割を果たしているが、以下では、資料館内部の 3 つのセクションの展示概要と共に調査報告を行いたい。

1. JOURNEYS: The Peopling of America (1550 年から 1890 年)

ここでは、エリス島の移民局ができる以前の歴史を展示している。筆者は特に、移民たちが北アメリカ大陸へやって来た時の状況を考えさせられた。この当時も、プッシュ要因やプル要因といった、現在と共通する理由から移民が生まれた。それにもかかわらず、何れにしても当時の移民の日記を読むと、長い船旅の末に残酷な仕打ちを受けた旨が綴られている。現在との状況の違いに驚かされた。それと同時に、この歴史があったから

写真 2 フェリー乗り場に並ぶ人々
（博物館内展示物）撮影者：武藤

こそ、移民に対する制度や処置が考え直されたのだと痛感した。更に奥へと進むと、アメリカ最初の移民局であるキャッスル・ガーデン[3]の模型が展示されていた。ここは、エリス島の移民局と比較すると規模が小さく、収容に限界があったことが理由で移転したそうだ。

2. The Ellis Island Experience (1890 年から 1954 年)

写真 3 移民が収容された場所　撮影者：武藤

ここでは、キャッスル・ガーデンの閉鎖後、エリス島に移民局が建立されてからの歴史が展示されている。このセクションが最も長く、内容が充実しているように感じた。階段を上って最初に見えるのが、移民が収容されていたホールであった。ここは、当時の空間がそのまま残されている。奥へ進むと、移民が審査を受けていた流れに沿って説明を受けることができる。以下では展示内容を詳細に説明しておこう。

1890 年代、移民たちは等級ごとに審査、振り分けされていた。１等、２等に値する者は全体の 25%に過ぎず、残りの３等、下級に該当する者はエリス島へと連れられ、更なる審査を受けることとなる。展示解説によれば、ここで入国を拒否された場合、ヨーロッパへ追い返されるため、非常に緊迫した空気が漂っていたようである。移民の種類は当時から多岐に渡っていたことから、多くの通訳者が駐在していた。だが、通訳者から差別を受けた移民も多く、長時間待った挙句、審査直前に追い返されてしまう事例も少なくなかったようである。

写真 4　トラコーマという眼病の検査を受ける列に並ぶ人々（博物館内展示物）撮影者：武藤

審査の中で、特に病気に関しては非常に厳しく、多くの展示が目についた。ただの髭剃りの傷が発見されただけで連行される者、病名の記されたコートを裏返しに着た者のエピソードを、彼らの音声ラジオで聞くことができた。彼らの声に耳を傾けると、人間として普通の出来事にも関わらず、差別や偏見を受けていたことが分かる。その先のブースでは、精神異常チェックについて詳しく展示されている。故郷に残された家族を連想し、涙した者が精神異常者と判断され、検査されている写真を見ることもできた。

これまで述べてきたことは、審査のほん

[3]現在のバッテリー・パーク。エリス島の移民資料館と自由の女神があるリバティー島への船乗り場となっている。

の一部にすぎない。筆者が博物館を回るだけでも体力を使い、疲労を感じた。当時の移民たちが空腹、精神不安を抱え、多くの人に揉まれながら長い審査を受けていた状況は過酷だったことが想像される。それに加え、外の世界へ出てからも苦難が待ち受けていたことは言うまでもない。

3. JOURNEYS: New Eras of Immigration (1945 年から現在)

ここでは、現代の移民問題を題材としたクイズや、展示物が置かれている。筆者にとってもニュースで身近に感じる、20 世紀の難民問題やテロの歴史も振り返ることができた。これ以前のセクションでは、アメリカに住むことを誓った当時の移民の様子をはじめ、入国後の生活、移民問題について広く考える機会を得ることができた。このセクションで筆者は、過去の制度や様子を理解することも勿論大切なことであるが、移民と称される者の枠組みは日々変化し、問題も同様に変化しているということを実感した。数年後に訪問すれば、展示内容も変化、増加するに違いない。

この章で、移民がアメリカ、ニューヨーク市へ足を踏み入れた当時の様子について、理解を深めることができたと言えよう。ここまでは移民という広い枠組みを対象とした。次の章からは、ドイツ系、ユダヤ系、イタリア系、中国系の各移民について具体的に述べていく。また、それぞれの関係性や、同時代に生きた共通点にも注目していきたい。

第二章　ドイツ系アメリカ人―19 世紀前半―

メノナイトと称する新しい教義を信じた人々の一団が、その信仰ゆえに本国を追われ、信仰の自由を求めてアメリカへ渡ったことがドイツ系の始まりだと言われている。初期はアメリカの東海岸のペンシルバニアに定着する者が多かった。その後、彼らは、ニューヨークの西部から五大湖の南に沿ってオハイオ、ミシガン、ウィスコンシン、ミネソタを経て南北ダコタ州に至る地域へと移動した。

本研究で調査したニューヨーク市のドイツ系移民は旧移民の代表であり、19 世紀前半に最も数を増やした。商人出身の者が多く、貿易業で大きな役割を果たしたため、アメリカへ溶け込むのが早かったと言われてきた。1870 年代にはニューヨークの人口の 3 分の 1 を占めるまで増加している。現在でもアメリカの人口でドイツ系移民の子孫が最多であり、特に言語における彼らの影響は大きいと言われている。その歴史の一つとして、イギリスからの独立後の 1794 年に、あるドイツ系の農民が合衆国下院議会に対して請願を出したことが有名だ。その内容は、全ての法律と政府規制を英語とドイツ語の二か国語で出版して欲しいという要請であった。この時期に民衆の反英感情が高ぶっていたことが要因だと言われている。最終的に、当時の下院議長はドイツ人も早く英語に慣れるべきだという意見を述べ、提案を拒否した。しかし、公の文書を複数の言語で出版すべきだという考え方は、今日のアメリカでは広く受け入れられる主張となった。例えば、ニューヨーク市では、30 以上の言語で自動車の運転免許の取得が可能である。また、公立学校では複数言語での教育が行われて

いる[4]。

写真 5 テネメント博物館入口撮影者：武藤

このような彼らの歴史を踏まえた上で、テネメント博物館を訪問した。この博物館はロウワーイーストサイドに位置し、1863 年から 1935 年まで、20 種、約 7000 人の移民が居住していたテネメント（共同アパート）に由来する。1988 年に、そのテネメントを修復して作られた。そのため、ドイツ系に限らず、ユダヤ系（ロウワーイーストサイドに最も色濃く文化を残した。第 3 章参照）やアイルランド系の移民に関するツアーも用意されている。年中無休で毎日多くのアクティビティがあるため、社会科見学のようなイベントを通して現地の学生も多く訪れるそうだ。筆者が訪問した際には、Hard Times というツアーに参加した。このツアーでは、あるドイツ人の部屋を再現しており、当時のエピソードを聞くことができた。博物館内は写真撮影が禁止であったため、中の様子を公表することはできないが、テネメントの綺麗な外観とは大きく異なる風景に驚いた。ツアーを通して、彼らの生活は少しずつ豊かになっていく様子が分かったが、総じて衛生環境は良いと言えず、エリス島の移民資料館での光景と似たような状況だと感じた。ここで、移民が高い生活水準を得るには多くの時間と労力が必要であったことを再確認した。全てのツアーに参加することはできなかったものの、このテネメントに住んでいた住民たちは共通して貧困に悩まされていたということが分かった。多い時には 5 階建てのテネメントを 1 フロア 4 家族ほどが使用していたため、同時期に 1 棟に 100 名以上住んでいたということになるのだ。エリス島から先に進んだニューヨーク市での生活を知ることで、現在の生活との比較をすることができた。

第三章　ユダヤ系アメリカ人―19 世紀後半―

本章までに触れてきた出身国や人種別に分類された統計に、ユダヤ人は出てこない。彼らは宗教的集団で、「ユダヤ教徒」とされているからである。国家は宗教を調査対象としないため、アメリカの公式の調査では「ユダヤ人」について言及しないのが普通である。しかし、1880 年代以来、新移民の一部として、東ヨーロッパからのユダヤ移民が急増し、やがて 1910 年には市の総人口の 4 分の 1 である 125 万人となった。統計上、ロシア系とされている者の多くはユダヤ人だったのである。当時のロシア帝国はリトアニア、ラトビア、エストニアのバルト三国、フィンランドに加え、ポーランドの大部分を占めていた。その地域でユダヤ人は最下層に属するものとされており、排斥や虐殺の対象となったことがユダヤ系移民急

[4]明石紀雄、飯野正子『エスニック・アメリカ』有斐閣、2011 年、144 頁参照。
松尾弐之『民族から読みとく「アメリカ」』講談社選書メチエ、2000 年、43 頁参照。

増の原因であったと考えられている[5]。

彼らはリトルイタリーの東側、ロウワーイーストサイドに大きなコミュニティを形成した。彼らの移住は家族ぐるみの移住であった。当時の南東ヨーロッパ系の新移民は 4 分の 3 が男性であり、児童の数が少なく、大部分が賃金労働適齢の男性から構成された。つまり、単身で出稼ぎに着た者が多かったということだ。ところがユダヤ系は、男女比率がかなり均等であり、児童の比率が高い傾向にある。北西ヨーロッパからの旧移民よりもこの特徴が著しかった。必ずしも家族全員が一緒に渡米したわけではないが、彼らは家族をあげて、恒久的に定住するという目的を持っていた[6]。

本研究旅行では、ユダヤ文化を色濃く残しているロウワーイーストサイドを散策した。すると、シナゴークやユダヤ系のデリを目にすることができた。その際、地元の方のお勧めで、

写真 6 KATZ’S DELICATESSEN 外観　撮影者：武藤

写真 7 看板メニュー Pastrami 撮影者：武藤

ユダヤ系由来の老舗デリ KATZ’S DELICATESSEN で昼食を摂った。ここは、ニューヨークで最も古いデリカッセンで、ユダヤ人発祥のパストラミをメイン料理として提供している。この店の横の通りには、ユダヤ系の軍服の古着屋や魚屋が立ち並んでいた。後日、ユダヤ博物館にも訪問した。その展示物によると、ニューヨーク市には現在でも 200 以上ものシナゴーグと宗教学校があり、文化と宗教に深く根付いた生活様式が継承されているということであった。また、コミュニティ内で社会人学校や夜間学校を設立しており、英語教育にも熱心に取り組んでいる。こうした背景の下で、ユダヤ人はアメリカの教育機関や医療機関に対して多くの人材を輩出し、大きな影響を与えているのであった。これは、前述した家族ぐるみの移民が多いことが関係していると筆者は考えた。移住してから妻子を持つ場合とは違い、ユダヤ系移民は予め子どもの教育について関心を持っていたのではないか。元来の彼らの間では専門職の地位は高く評価されており、その地位への志向は強かったそうだ。学問を尊ぶ彼らの文化において学者は尊敬され、移住してからもこの状況は変わらなかったと

[5] 明石紀雄、飯野正子『エスニック・アメリカ』有斐閣、2011 年、163 頁参照。
[6]野村達郎『ユダヤ移民のニューヨーク』、山川出版社、1995 年、18 頁、120 頁参照。

いう。つまり、居住地が変化しても彼らにとって教育を受けることは社会的に必須であり、親が子供に高い教育を受けさせようと努力する傾向が強かったとい言える。そして、その面で母親は大きな役割を果たした証として、今日の日本語の「教育ママ」に相当する英語は、Jewish Mother であることが挙げられる。こうした背景により、医師、歯科医、弁護士になるユダヤ人も多かった。1937 年のニューヨーク市において、ユダヤ人は市人口の 25%を占めていたが、市の弁護士および判事の 65%、歯科医の 64%、医師の 55%がユダヤ人であった[7]。今回の調査で明らかとなったのはここまでである。よって、卒業論文ではユダヤ人と教育の関連性についてより詳細に論じていくことが課題となった。

第四章　イタリア系アメリカ人―１９世紀後半―

新移民を代表するイタリアからの移民が最も盛んだったのは 1905 年頃である。しかし、その前後で移民の性格が大きく変わる。まだ移民の数が少なかった時代は、経済的に裕福な階層が宗教的な理由でアメリカに渡った。その大部分は北部の出身者である。例えば、北イタリアでワルデンシアンと呼ばれたプロテスタントの一派に属する者たちが、カトリック教会の迫害を逃れてアメリカへ渡ってきた。彼らは農民となってオレンジ、ブドウ、レモン等の故郷の作物を栽培し、成功している。19 世紀末のニューヨーク市の果物取り引きはイタリア系が仕切るまでに至った。イタリア系移民最盛期にアメリカへやって来たのは南部出身者だ。1870 年にイタリアが統一したとはいえ、特に農業地域で生産力の低かった南部の貧困は酷かった。そのため、国も産業奨励策の 1 つとして外国への出稼ぎを勧めていたことがイタリア系移民増加の背景にある。彼らは、カトリック教徒で、北ヨーロッパとは異なった食べ物や種類を持っていた。つまり、前述した北部の出身者とは異なる文化を有し、アメリカでの生活も対称的であったのだ。彼らは宗教や言語、文化の違いにより、旧移民から差別を受けていたことが原因で、同郷だけで固まるようになったという。その結果、20 世紀に入る頃には、第 14 区（Fourteenth Ward）の住人の 90%はイタリア生まれか、イタリア系であった[8]。

写真 8 第 14 区に位置するイタリア国旗柄のテネメント 撮影者：武藤

筆者はイタリア系アメリカ人を研究対象として、在米イタリア人歴史博物館を訪問した。最初に職員の方の案内があり、15 分程のイタリア移民の歴史に関する動画を視聴した。博物館自体はとても小さいため、言語理解に問題がなければ 30 分程で展示物に目を通すことができる。展示内容は、現在の Mulberry street にイタリア人のコミュニティを築く過程と、19 世紀の生活が多くを占めていた。この時代、マンハッタン区ではイタリア系が金融機関を軸にコミュニティを形成していた。同

[7] 野村達郎『ユダヤ移民のニューヨーク』山川出版社、1995 年、120 頁参照。
[8] 松尾弐之『民族から読みとく「アメリカ」』講談社選書メチエ、2000 年、136 頁参照。

写真 9 リトルイタリー 撮影者：武藤

博物館も彼らが経営していた銀行の跡地に設立されている。勿論、社会に馴染もうと努力した者もいるものの、このような集団意識の名残で、現在でも一部では縁故関係の制度が残っているそうだ。展示スペース終盤の壁にはイタリア系のイベントやコミュニティの告知が掲示してあり、再度他に調査した民族と比べて帰属意識が高いように感じた。最後にインタビューに応じてくださった職員の方の話の中で、二つの話題に関心を持った。まず一つ目は、19 世紀に最も多くの移民をアメリカに送り込んだのはイタリアであったが、同時に最も多くが帰国したのもイタリア移民であったということだ。同時代に流入し、近隣のロウワーイーストサイドに定住したユダヤ系との違いに驚いた。このことが気になり、更に調べてみると、イタリア南部からの移民は出稼ぎを目的としていたことと関係することが分かった。また、これが理由で社会との交流も少なく、他の民族と比べて文化風習や言語教育に励む者も少なかったようだ。二つ目は、現在、イタリア人街として知られるリトルイタリーは縮小の傾向にあるということだ。観光客のためにレストランや雑貨屋は残っているが、そこで働く人々はマンハッタン郊外などに家を持ち、仕事のためにリトルイタリーへ足を運んでいる。そこに居住しているのはほとんどがチャイナタウンから移動してきた中国系の人々だというのが実状である。これは、筆者自身もフィールドワークを通して体感したことであった。周辺にはヨーロッパからの観光客とガイドが多く見受けられ、ロウワーイーストサイドや、早朝から活気のあるチャイナタウンと比較すると明らかに規模が小さかった。しかし、サン・ジェナーロ祭りなどのイベントでは多くの人が集まっており、イタリア系の人々や文化を尊重する役割を果たしているように思える。閉鎖的な性格を有していた彼らが、今では社会に受け入れられている光景を目に焼き付けることができた。

写真 10 リトルイタリーの出店 撮影者：武藤

第五章　中国系アメリカ人

1965 年の移民法の施行に伴い、多くの中国人がアメリカへ流入した。その結果、1960 年から 1980 年の間に、人口は 236,084 人から 807,027 人へと実に 242%の伸びを示した。更

に、ある調査によると、1985 年には 1079,400 人に達しており、僅か 5 年で 34%の伸びを示した[9]。このように、今日、アメリカで中国人のコミュニティは急速な勢いで各地に広がっており、メキシコ人に次いで 2 番目に大きい移民グループへと化した。

ニューヨーク市に関しては、チャイナタウンの人口が 1960 年代半ばから急激に増加した。それに加え、クイーンズ区のフラッシング郊外には、新しい中国人コミュニティが、昔からあるチャイナタウンの衛星都市として急成長している[10]。しかし、前述した移民法の施行前は第一次大戦の影響で移民排斥運動が高揚し、アメリカは自国経済の保護を目的として移民を制限、とりわけアジアからの移民を厳しく制限していたという背景がある。当時、中国系をはじめとするアジア系移民も多くが差別を受けており、女性移民を禁止、また子孫を残すことも禁じられた時期もあったということを忘れてはならない。

筆者は、以上のような背景を持つ中国系アメリカ人ついて調査するために、在米中国人歴史博物館を訪問した。この博物館は、ダウンタウン（14st から南側）の中心部に位置し、MOCA の愛称で親しまれている。展示は 1784 年、最初の中国人がニューヨークにやって来た頃から始まるものの、それに限らず、西洋各国での中国人の歴史と文化についても触れられている。主に茶、シルクの貿易に関する展示が多く、筆者の持つイメージと一致していたように思う。中へ進むと、1930 年代、手動洗濯業とレストラン業で生計を立てるようになった彼らの生活を垣間見ることができる。

写真 11 1930 年代のレストランメニュー
（博物館内展示物）撮影者：武藤

写真 12 手動洗濯で利用されていた器具
（博物館内展示物）撮影者：武藤

まだアジア系の移民が少ない中で、彼らは低賃金ではあるが、需要のある職に就き、生計を立てるようになった。この時代に移民としてやってきた人々を頼って、1890 年代に多くの

[9] Robert W. Gardner et al., “Asian Americans: Growth, Change, and Diversity,” p.5.
[10] ピーター・クォン『チャイナタウン・イン・ニューヨーク』、筑摩書房、1999 年、38 頁

中国系移民が押し寄せることとなる。その後、彼らはマジシャンや映画俳優など、エンターテイナーとしての役割も果たすようになり、一部成功者と呼ばれる者も出てくるようになった。その当時の無音、白黒の映像を見ることもできる。展示の最後は戦争がメインとなっている。在米中国人、中国人視点での太平洋戦争がテーマとなっていた。展示物が筆者の知るものとは大きく違ったため、視点によって物事のあり方が大きく変化するのだと実感した。その他には、幼い子どもからお年寄りまでに渡る、アメリカの将来についての意見が書かれたメッセージを拝見することができた。この時、筆者は、自身の出自にまつわる歴史博物館を訪れる習慣は移民特有であると感じた。同時に、移民たちが博物館という公共機関を通して主義主張を表明しているように思えた。以上が展示概要である。

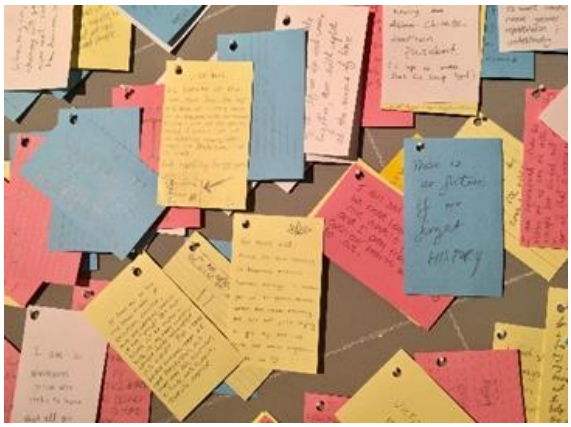


写真 13 訪問者による、将来のアメリカについてのメッセージ（博物館内展示物） 撮影者：武藤

筆者は、この博物館で特に「食」から中国系移民の社会参入について考察する新たな視点を得ることができた。とりわけ前述のレストラン業で生活を成り立たせた中国系移民に関心を持った。当時アジア人として差別を受けてきた彼らは、アメリカ人に受け入れられるよう、アメリカン・チャイニーズフードを確立させた。筆者が滞在 2 日目にして多く目にした Panda Express もその名残であり、中国系移民の苦労があったということを知ることとなった。

博物館の一部に、中国の漢方やお茶の店を再現した部屋があり、会員や訪問者が週に何度か利用できるようになっている。筆者が訪問した日は利用日ではなかったが、職員の方にインタビューをする際に使用させていただくことができた。インタビューに応じてくださった方は以下 2 名であった。①Alina 氏（24 歳）彼女は、中国系移民 3 世で、生まれたときからニューヨーク市に居住している。祖父母はチャイナタウンで有名な中華料理屋を営んでいたそうだ。現在は引退しており、ウォールストリート周辺に家を買い、3 世帯で豊かな生活を送っているそうだ。②Young 氏（48 歳）彼女は 23 歳の時に中国から移民としてニューヨークへやって来たそうだ。当初は、チャイナタウンのアパートに居住していたという。それから 25 年、現在はブルックリン区に居住するものの、彼女の息子はチャイナタウンの学校に通っているそうだ。このように、高い教育水準を求めて遠方から通う生徒も多いという。インタビューを終え、両者に共通することは、生活水準が変化すると、チャイナタウンから居住地を変えるということだ。そして、自身が移民であるという「意識」をほとんど持っていないということだ。学校や地域のコミュニティでも他民族と触れ合う機会が多く、私たちでいう性格や個性に似たもののように感じた。それに対し

て、旧正月は家族で祝うなど、中国人としての精神も併せ持っている点に関心を持った。

写真 14 Columbus Park でカードゲームをする中国系の人々 撮影者：武藤

以上に加え、チャイナタウンでのフィールドワークとして、まずは 1890 年にできたコロンブスパークに立ち寄った。ここではテーブルゲームで遊んでいる多くの老人の様子が窺える。直前に訪問した博物館周辺の様子とは大きく違い、彼ら以外の人は殆ど見当たらなかった。聞こえてくる言語は中国語で、視覚、聴覚、共に中国にいるような感覚に陥る。筆者はチャイナタウンでのインタビューも予定していたが、中国語を話せないため、英語を話せる人を探すのに時間を要してしまった。インタビューに応じてくださった女性（67 歳）によると、街は広東語とマンダリン語の居住地に分れているそうだ。ニューヨーク市に属するにも関わらず、積極的に英語を話そうとせずとも一生暮らすことができるということに驚いた。他には、昔と比較した最近のチャイナタウンの様子についても伺ってみた。筆者が実際に立ち入ることはできなかったが、近年、建物の中の様子が大きく変わってきているそうだ。周辺の地価が上がったことが原因で、家を出てホステルで暮らす中国系移民がいる一方で、仕事のできる裕福な白人が居住するようになるという状況である。このように、街を歩くだけでは分からないことを当事者から聞くことができたのは大きな収穫だ。その後もしばらく散策をしてみると、博物館職員の Young 氏の子息が通う学校に辿り着くことができた。その横に併設するトランスフィギュレーション教会は、1801 年に建てられた教会であり、当初はアイルランド人とイタリア人の教会だったといわれている。街中にこのような教会や施設は多く、看板の文字が異なる言語で書き換えられた跡が見られた。この地域に住んでいる人種の変化に気づかされる。街の下へと下ると、職業紹介の看板を発見した。このことから、今でも中国系の移民が増え続けていることが確認できた。

チャイナタウンのインタビュー、フィールドワークを通して、街の中も外も大きく変わってきていることが分かった。直ぐ隣のリトルイタリーと比べると規模が大きく、居住者も多いが、レストラン等は観光地としての側面を持つという共通点もあることに気づいた。ある時期は差別を受けたにも関わらず、社会に受け入られている在米中国人も目にすることで、移民への解釈は時代と共に変容することを実感した。

最後に

この研究では、研究対象を在米移民と広く定義したが、一口に移民と言っても、時代や民族によって特徴があることを実感した。筆者は、各移民同士の関係性や特徴を押さえること

で、移民としての傾向や、ある民族としての性格を整理することができたことは大きな成果だと感じている。

本論文で触れた全ての移民に共通することは、エスニックタウンという移民コミュニティ、もしくは集合住宅が、移民と社会の繋がりを強くしているということだ。そこには、似たような境遇の者が集まるため、移民の帰属意識を高める役割を果たしている。このことは、特に閉鎖的な性格を持つイタリア系移民の例が最も分かりやすいだろう。しかし、それが、今では他者から見て観光地という側面や、生活の一部という役割へ変化し、他者や民族と接する場所となっていることは非常に興味深い。つまり、エスニックタウンは移民の個性を保ちつつ、彼らとアメリカ社会を結びつける役割を担っているのだ。ここが、移民の社会参入の場の一部とも言えよう。時代の変化と共にその規模や場所は変化することは、本研究によって明らかになった。しかし、移民の社会的地位や生活状況の特徴を顕著にみることができるため、今後、移民について研究する際も、エスニックタウンの調査が欠かせない。

また、彼らは共通してアメリカ社会のマイノリティとして一度は差別や排斥を受けてきた。その逆境を乗り越え、アメリカ社会の一員となり、指導的地位に就く者など、様々な形でアメリカ社会に関わっていく者が現れるようになる。しかし、歴史を辿る中で、昔と比べて法的制度という観点では移民は受け入れられているが、意識的差別や偏見は今も残っていることや、差別の連鎖が依然として存在することを感じた。差別を完全になくすことは難しく、これからも繰り返し起きていく可能性がある。この研究で、意識的差別をなくすためにとるべき処置は何なのか考えさせられた。